

精製システムの紹介」と題して、Agilent Technologies社 1200LC分取精製システムの紹介があった。マイクロスケール分取から分取LCスケールまでの多様なスケールへ対応することの有用性とシステムの特徴が紹介された。

岡村和代氏（日本分光）より、「食品中残留農薬のSFE抽出前処理システム」と題して、短時間に効率良い抽出を実現し、環境負荷の小さいCO₂を用いたSFE抽出前処理システムの機能とGC/MS、LC/MSと組み合わせた食品中、土壌中農薬の応用測定例が紹介された。

今中努志氏（ジーエルサイエンス）より、「食品中の農薬分析におけるGPCクリーンアップシステム」と題して、GPCクリーンアップシステムの特長とシステム最適化の手法、SPE法と比較、応用測定例が紹介された。

最後に、本会の中村 洋委員長（東京理科大学）より「総括：HPLCを用いた専用システム」と題して、システム品に必要な要素、今後システム品化が考えられる研究内容など、現在また将来にわたり専用システムを考える上で貴重なお話をいただいた。

今回の講演主題は、「老テク（従来からある技術）はローテク（Low Tech）にあらず」のオーガナイザーの私見から、最先端技術追求の脇に追いやられがちで、実はかけがえのない「Something」を専用システムの中に発見し、伸ばしたいとの発想から選択し開催した。演者の皆様を始め、研究懇談会運営委員各位のご協力により、当初の目的の多くが達せられたと感じている。

なお、本講演会は通常東京理科大学薬学部校舎（野田）を会場として開催しているが、今回は今話題の情報最先端基地「秋葉原」にある日立ダイビルにて開催した。講演会終了後の懇親会は、同ビル最上階にある日立社食「何の木」で行った。東京の夜景を楽しみつつ、システム品の来し方行く末に思いを馳せながら、いつもとは一味違うLC論議に花を咲かせ、交流を深めた。

〔(株)日立ハイテクノロジーズ 谷川建一〕

第3回液体クロマトグラフィー研究懇談会 特別講演会・見学会

液体クロマトグラフィー研究懇談会では、7月14日（金）にアサヒビール株式会社神奈川工場において、第3回特別講演会・見学会を開催した。本会は、本研究懇談会会員が様々な業種の企業や、大学、官公庁を見学することにより、液体クロマトグラフィー（LC）に関する情報を入手し、LCの将来像を模索していくこととし、特に見学先との情報交換等によりLCに限らず幅広い分野の知見を得ることを目的として昨年より開催されている。今回が3回目の開催となり、参加者は57名であった。

13時、見学会小委員長を務める佐々木久郎委員（関東化学）の司会で開会し、中村 洋委員長（東京理科大薬）の挨拶の後、竹本秀明氏（アサヒビール神奈川工場長）より当工場の概要についてのご講演があった。2002年5月に操業を始めた当工場は環境への配慮も深く、コ・ジェネレーションシステム、完全



ノンフロン化や廃棄物の削減等について先進的な企業努力を行っており、工場内で春には桜、初夏には自生の蛍が楽しめる旨ご紹介があった。続いて、「HPLCと糖尿病」と題して岡橋美貴子氏（病態解析研究所）より講演が行われた。現在、日本人の1割以上が糖尿病の可能性を否定できない状況にある中、合併症の兆候を早期に発見するための検査の重要性を述べられた上で、迅速で信頼できる検査法の確立の必要性和HPLCを用いた分析法の発展の可能性について述べられた。次に「アルコールと健康」と題して望月直樹氏（アサヒビール）より講演が行われた。多量な飲酒は身体に様々な悪影響を及ぼすが、適度なアルコール摂取はリラックス効果をもたらすなど効能もあるため、お酒は薄めに適量を守って飲むほうが良いと述べられた。続いて、「ビール鮮度への挑戦」と題して木村貴志氏（アサヒビール）よりアサヒビール(株)におけるビールの鮮度を保つための二つの取り組み「酸化防止技術の導入」および「フレッシュマネージメント」が紹介された。

上記講演の後、2班に分かれてアサヒビール神奈川工場の見学を行い、原料となる大麦、ホップからビールへと製品化される工程の説明を受けた。見学終了後は、出来立てビールの試飲、また、「出来立てビール」、「2か月前のビール」、「出来立てであるが日の当たる場所で1時間保管されていたビール」の3種類の飲み比べや美味しいビールの注ぎ方なども伝授いただいた。その後、同工場敷地内にあるアサヒビール園「神奈川・足柄店」へ場所を移し、美味しい焼肉とフレッシュなビールで、LCに関する話題のみならず、様々な分野の話で盛り上がり交流が深められた。

最後になりましたが、お世話になりましたアサヒビール神奈川工場長竹本秀明氏、工場をご案内いただいた園部チーフ、長さんをはじめスタッフの皆様には深く感謝いたします。

〔メルク株式会社 清 晴世〕

第333回高分子分析研究懇談会（夏期合宿）

高分子分析研究懇談会の2006年度第333回高分子研究懇談会例会（夏期合宿）が7月7日・8日の2日間に静岡県熱海市のホテル、アストン熱海（旧vivi熱海自然郷）で開催された。緑に囲まれた清々しい雰囲気の中、興味深い講演と全47名の参加者による熱心な意見交換が終日にわたり行われた。

初日の第1セッションは本研究懇談会の運営委員長、脇阪達司氏による開会挨拶でスタートした。最初の講演は清野晃之氏(函館高専)による「マトリックスフリー」のソフトレーザー脱離イオン化-質量分析法による高分子および添加剤の分析」と題した内容であった。現在広く用いられるようになったMALDI-TOFMSに代わり、マトリックスを用いないで測定を行えるDIOS-MSに関する研究成果の紹介を中心に講演いただいた。MALDIでは測定できなかった試料にも利用できるなど今後の発展に興味を持たれた。次に「高分子の溶液NMRの最近の話題—LC-NMRとDOSYを中心に」と題して、右手浩一氏(大阪大学)によって最新のNMR測定法の紹介と研究成果に関する講演が行われた。この講演では、LCとNMRを組み合わせて行った高分子共重合体の組成解析の例や、DOSYを用いたNMR測定によって混合物を分離せずに分析した例などを解説していただいた。また、これらの分析における問題点やその解決方法などもわかりやすく説明していただいた。初日最後は、船津公人氏(東京大学)に「予測と設計のためのケモインフォマティクス」と題して講演いただいた。コンピュータを利用することによる研究開発の効率的な推進に関して、具体例を挙げられながらわかりやすく解説していただいた。特に高分子の材料設計にケモインフォマティクスを導入することによって、予想していなかった組成でも期待される性能を発揮できることを予測できるなど、実用性の高さに興味をそえられるものであった。

夕食後、「MS」「NMR」「構造推定&ケモメトリクス」の3分科会に分かれ、講師の先生方を中心に約2時間にわたって活発な議論がなされた。分科会のあと合宿恒例の懇親会が行われ、様々な話題について参加者間でにぎやかに交流が行われた。

例会2日目は、木村恒久氏(首都大学東京)から「磁場を用いた有機、高分子材料の配向、配列制御と、結晶構造解析への応用」と題した講演が行われた。磁場中での高分子や有機化合物の様々な特性について、非常にわかりやすく説明していただいた。特に動画を用いた実験の説明は懇談会のメンバーに限らず、中学・高校生などにも親しめるもので、化学のおもしろさを伝えていただける講演であった。続いて「超臨界〜亜臨界流体を用いるプラスチックのリサイクル技術の研究開発動向」と題して佐古 猛氏(静岡大学)による講演が行われた。講演では超臨界流体とは何かをわかりやすく説明していただいた後

に、実際に超臨界流体をプラスチックリサイクルなどに利用するための方法論、応用例などを示された。またポリマー解析に超臨界流体を用いた例なども示され、その可能性の広さに驚かされた。

本例会の締めくくりとして、初日夜に行われた分科会のまとめ報告が加藤浩一氏(ポリプラスチック)、永阪文憲氏(帝人)、小林恒夫氏(大日本インキ化学工業)から行われた。日頃感じている疑問や課題について率直な意見交換がなされて、参加者には有意義な分科会であった様子がうかがわれた。

いずれのセッションも興味深く充実した内容の例会であった。幹事として本例会の企画運営を担当いただいた川口正剛氏(山形大学)、大関 博氏(旭化成)の尽力に感謝したい。

[産業技術総合研究所 松山重倫]

◆ 理事会だより

2006年度第3回理事会が6月16日13時30分から19時まで本会会議室で開催されました。2006年度としては第3回ですが、現在の理事会としては最初の定例理事会となります。小泉会長から議長としての挨拶をいただいた後、報告事項25件、承認事項22件、審議事項11件と盛りだくさんの内容について検討・議論しました。その中で比較的時間をかけた事項のうちのいくつかについて、その概要を報告します。

会員関係では、飯田芳男氏と寺田喜久雄氏が春の叙勲の榮譽に輝かれたという喜ばしい報告と、永年会員菅野卓治氏のご逝去という悲しい報告がありました。承認事項の“会員入・退会の件”では、119名の入会と47名の退会を承認しました。この数字だけを見ると72名の増加になりますが、前年同月と比較すると224名の減少になっています。2001年からの会員数の推移を見ても、会員数の減少は止まらないという傾向が見て取れます。関係者の尽力により入会者は増えていますが、それを上回る退会者が出ているところに原因があるようです。承認事項の“会費滞納会員の件”では、1年以上会費を滞納している会員444名(正会員399名、学生会員45名)について事務局から「会費滞納会員には本部から督促状を送って催促するが、9月の理事会までに会費を納入しないと除籍になる」との説明がありました。5%強の会員が除籍になっては大変ですので、督促状に替わる催促の方法や催促のシステム等について議論しました。いろいろな意見が出ましたが、入会時の紹介者と支部が協力して、電話等で本人に直接連絡するのが有効な方法のような気がしました。

冒頭で述べたように、現在の理事会としては今回が最初の定例理事会となるので、いくつかの常置委員会について提案にしたがい委員を委嘱しました。その審議の過程で「委員の任期」、「委員長の選出方法」、「目的や活動状況が見えるシステムの構築」等について意見が出ました。種々審議の結果、会長の諮問委員会として理事会の中に「組織検討ワーキンググループ(仮称)」を設置し、常置委員会の組織や規定の見直しをしていくこととしました。

審議事項の“役員等候補者推薦委員会開催の件”では、この議題が「公益法人制度改革法による任期2年化」と密接に関

